

# 嘉吉の乱と井原御所

水 野 恭 一 郎

## 一

嘉吉元年（一四四一）六月二十四日、室町將軍足利義教は、当時播磨・美作・備前三国の守護であつた赤松満祐の京都の宿所、西洞院二条の赤松第において催された猿樂の宴に臨んだ。この日、満祐は赤松第の宴席には参仕せず、赤松年寄衆のひとり富田入道性有の宿所に留まり、満祐の嫡男教康が、赤松第における將軍饗応のことに當つたが、この催しは、『建内記』同日条の記事によれば、「赤松彦次郎教康、依<sup>二</sup>諸敵御退治嘉礼<sup>一</sup>、成<sup>二</sup>申渡御<sup>一</sup>、近日人々有<sup>二</sup>此経営<sup>一</sup>之故也」と記されている。この「諸敵御退治の嘉礼」というのは、將軍義教の弟で、かつて兄義教と將軍の継嗣を競つた大覺寺門跡義昭が、永享九年（一四三七）七月、義教に叛いて京都から大和国に出奔し、次いで九州に渡つて日向国に潜居していたのが、嘉吉元年三月、同国那珂郡櫛間の永徳寺において、薩摩・大隅・日向守護島津貴久の手によつて討たれ、四月、その首級が京都に送られてきたこと、および、大覺寺義昭と同じく、義教の將軍襲職のとき以来の対立者であつた鎌倉公方足利持氏が、永享十一年、永享の乱で敗死したのち、その遺子春王丸・安王丸を奉じて常陸に兵を起こしていた結城氏朝の結城の城が、やはり嘉吉元年四

月陥落して、五月初め、氏朝・春王丸・安王丸の首級が京都に送られてきたこと、この東西における將軍の御敵退治を慶賀するための宴ということであつた。將軍の御供には、管領細川持之・侍所頭人山名持豊をはじめ、畠山持永・細川持常・同持春・大内持世・京極高數・一色教親らの諸大名が陪席していたが、この猿樂の宴の席上において、赤松方の不意の襲撃によつて、將軍義教が弑逆の難に遭うという不慮の事態が起こつたのである。<sup>(3)</sup>いわゆる嘉吉の変である。

將軍義教を討つて、その首級を挙げた赤松満祐・教康父子は、満祐の弟義雅・則繁以下一族・家人らを率いて、西洞院二条の第をはじめ、洛中の一族の館に次々と火を放つて、京都から、その本国播磨に下つたのである。

かくして播磨に下国した赤松一族らは、飾磨郡の書写山南麓の坂本城に本拠を構えて、領国内の軍勢を集め、幕府からの赤松追討の軍を迎えうつ態勢を整えたが、このとき赤松満祐は、足利將軍家にゆかりのある足利義尊なる人物を、備中国井原庄から坂本の城に迎えて、將軍と称して、これを擁立したことが伝えられている。この満祐の足利義尊擁立のことについては、『建内記』嘉吉元年七月十七日の条に、

直冬子孫、爲<sub>レ</sub>禪僧<sub>二</sub>在<sub>二</sub>播州<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>彼可<sub>二</sub>取立申<sub>一</sub>由、赤松称<sub>レ</sub>之云々、後聞、此禪僧、元来在<sub>二</sub>播州<sub>一</sub>、已称<sub>二</sub>將軍<sub>一</sub>云々、比興々々、其弟、同禪僧、在<sub>二</sub>備中国<sub>一</sub>、已欲<sub>レ</sub>逃<sub>二</sub>播州<sub>一</sub>之處、備中国守護手勢打<sub>二</sub>取<sub>一</sub>之、其首、今月廿八日歟、京着也、

と記され、さらに八月二十一日の条には、

播州、故直冬子孫僧、先日被<sub>レ</sub>誅之僧舎兄之僧事也、号<sub>二</sub>伊原御所<sub>一</sub>、赤松取<sub>二</sub>立<sub>一</sub>之、還俗、其名義尊、以<sub>二</sub>彼判形<sub>一</sub>、諸方廻文之間、写<sub>二</sub>彼判<sub>一</sub>、相触諸関、於<sub>下</sub>帶<sub>二</sub>件判<sub>一</sub>之人上者、可<sub>二</sub>召捕<sub>一</sub>之由、管領加<sub>二</sub>下知<sub>一</sub>云々、と記して、その廻文に記されている義尊の花押の写しを書き載せている。

すなわち、この『建内記』の記述するところによれば、足利直義の養子（実は尊氏の子）で、南北朝時代に、父尊

氏に叛意をいだいて、西国地方において反幕府勢力として行動し、のちには南朝の与党ともなった足利直冬の子孫が、禅僧となつて備中国に在つて、「伊原（井原）御所」と呼ばれていたのを、赤松満祐が播磨に迎え、還俗して名を義尊と改め、当時すでに、これを將軍と称して奉戴し、この將軍義尊の名を以て、諸方に軍勢催促の文書を發給していたこと、また、この義尊に舍弟があつて、これも禅僧となつて備中国にあり、兄につづいて播磨国に赴かんとしたが、その途次、備中守護（細川氏久）の手勢のために討ち取られ、その首級が、七月二十八日に京都に送られてきたことを伝えているのである。

この『建内記』の記事のほかに、『東寺執行日記』にも、この義尊擁立のことを伝え、同書の嘉吉元年七月十八日の条に、

於播州幡上之、兵衛助殿御孫、歳廿九、

赤松大将憑云々、

とあり、文中の「兵衛助殿」は、すなわち足利直冬であつて、赤松氏が播州で旗揚げして、直冬の孫の年齢二十九歳になる人物を、大将とたのんで奉戴している旨を伝えている。

## 二

『建内記』および『東寺執行日記』に記述し伝えられているところの、この足利直冬の子孫と称する人物に関して、足利系図に伝えられる記載をみると、『続群書類従』第五輯下（系図部）所収の「足利系図」には、直冬の嫡子を「某」と記して、それに「中国武衛冬氏は也、号善福寺殿」と注記があり、すなわち直冬の嫡子は名を冬氏といい、この冬氏は中国武衛と呼ばれ、また法号を善福寺殿と称したとしている。そして、その冬氏の子として乾珍の名を記載し、「相国寺宝山和尚是也、（中連）絶海禅師弟子」と注記している。また、『系図纂要』第十冊（清和源氏

十二 所収の「足利將軍家系図」には、やはり直冬の嫡子を冬氏として、「号<sub>二</sub>中国武衛、善福寺<sub>一</sub>」と注記し、冬氏の末弟に乾珍の名を記して、「宝山和尚、(絶海中津)広照嗣法、相国玉潤軒、今熊野慈恩寺、(天竜寺)西山法久院等、嘉吉元年十二ノ廿五寂、四十八」と注記している。

これら足利系図の記述から、嘉吉の乱に赤松氏に奉戴された直冬の子孫という義尊について考えてみると、直冬の嫡男で、中国武衛と呼ばれた冬氏が、すなわち義尊であることは、年代的にみても無理である。

足利直冬の死去の年については、いくつかの伝えがあつて一定しないが、前掲の群書類従本「足利系図」では、直冬の没年を嘉慶元年（一三八七）七月二日とし、『史料綜覧』も、この足利系図の記載によつて、この日を直冬の没年として載せている。これに対して、『系図纂要』所収の「足利將軍家系図」では、直冬の没年について、「応永七年三ノ十一、卒<sub>二</sub>于石見、七十四」と記し、応永七年（一四〇〇）三月十一日、七十四歳にて石見国で死去したとしている。

このほかに『武家年代記』には、応永七年三月十六日卒とし、『鎌倉大日記』には嘉慶二年の条に「七月三日直冬於三石州<sub>二</sub>逝去」とし、また応永七年の条にも「三月足利直冬石見国ニテ卒」と両様の記事を載せている。すなわち、直冬の没年については、嘉慶元年ないし二年説と、応永七年説の、二説の伝えのあつたことが察せられる。このように足利直冬の死去の年は十分明確とは云えないが、その死去のときの年齢を伝えているのは、前掲の『系図纂要』所収の系図であつて、この系図に記される応永七年（一四〇〇）三月十一日卒、七十四歳の伝えを採用れば、直冬の誕生の年は、鎌倉末期の嘉暦二年（一三三七）になる。これは、直冬の実父である尊氏が嘉元三年（一三〇五）の生まれであるから、尊氏二十三歳のときの子ということになり、また、直冬の異母弟である第二代將軍義詮が元徳二年（一一三三）の生まれなので、直冬は、義詮より三歳の年長となつて、父尊氏および弟義詮との間の年齢関係は、大体、辻褄が合うようである。従つて、『系図纂要』所収の系図の記載は、かなりの信憑性をもつ

ものとも理解できる。

いずれにしても、足利直冬の生没年が、ほぼ右のようであるとすれば、直冬の嫡子である冬氏を、嘉吉元年（一四四二）の嘉吉の乱の際の、井原御所義尊とみることは、ほとんど無理であり、この点からすれば、『東寺執行日記』が、義尊なる人物を、直冬の孫で、年齢二十九歳と記しているのは、恐らく正しい伝えとみてよいであろう。嘉吉元年に二十九歳であれば、義尊は応永二十年（一四二三）の生まれである。

なお、群書類従本「足利系図」には、直冬の孫（冬氏の子）に禅僧乾珍の名を挙げているが、『系図纂要』所収の系図には、乾珍を直冬の子（冬氏の末弟として記載している。この乾珍は、両系図のいずれにも記されているように、京都五山の一つである相国寺に入つて禅僧となり、道号を宝山といい、永享四年（一四三三）三月には相国寺住持となり、次いで永享七年十月には、同じく京五山の一つ天竜寺住持、翌八年三月相国寺住持に再住、その間、相国寺に塔頭玉潤軒、天竜寺に塔頭法久院を興し、また相国寺鹿苑院主として、鹿苑僧録の地位にもあった、當時著名な五山の高僧である。直冬の子息であることも確かのようにあつて、群書類従本「足利系図」が乾珍を、冬氏の子として記しているのは誤りである。勿論、義尊とは全くの別人物である。従つて、直冬の孫と伝えられている井原御所義尊は、足利系図のいずれにも記載はみられないが、冬氏の子とみてよいであろう。

## 三

このように、足利系図の上には、その記載のみられない井原御所義尊と、足利直冬・同冬氏との関係の解明に資すべき史料として注目されるものに、備中国井原庄吉井村（現在の岡山県後月郡芳井町）の禅刹（臨済宗）重玄寺に所蔵される文書がある。

重玄寺所蔵文書の内、文安六年（一四四九）六月二十七日付、「備中国井原庄吉井村内、大月山重玄庵領所々名内

免田畠等、当知行之目録」と題する文書に、左記のごとき記事がみられる。

一所金永名一円諸公事共二  
田四段畠三段、山共二

善福寺大御所御寄進

一所得里名内田五段諸公事共二

明金長老御寄進

一所田老段 永代買得

売主鳥越方

一所田老段 永代買得

吉井  
売主次郎左衛門

一所畠參段 永代買得

売主大庭方公文給

已上田老町 畠六段

一、守護殿祈願所安堵御判一通并両守護代渡狀一通

一、善福寺殿御寄進狀 一通

一、明金長老御寄進狀 一通

一、田畠売券 三通

右、守護殿安堵御判并本寄進狀等者、文安四年八月五日之夜、盗人彼支證お悉取候、仍同五年二月十一日、  
国之両守護代庄出雲守・石川備前守両判之紛失狀お被成下候、同六年六月十一日、守護殿重而被成安堵御判  
候、同廿七日、重而本目錄お調候て、両守護代裏判お被成候、仍爲後日支證如件、

文安六年六月廿七日

重玄庵住持記

とあつて、紙背に、備中守護代庄出雲守と石川備前守兩人の花押がある。<sup>(7)</sup>

右の文書で注目されるのは、その記事の中に、「善福寺大御所」、「善福寺殿」の名のみられることである。すな  
わち、当時は「重玄庵」と呼ばれていた重玄寺の所領の内、金永名一円の田四段・畠三段および山は、善福寺大  
御所の御寄進であるというのである。ただし、この善福寺殿の寄進狀は、右の文中に記されているように、文安

備中國井原在吉井村山月山重玄庵領

取三名内元田景高知行目録

一形 金永名一圓 後云四九二  
善福寺文書寄進

一木 得里名田田五郎 善福寺文書寄進

一木 田寺殿 永代寄得 善福寺文書寄進

一木 田寺殿 永代寄得 善福寺文書寄進

一木 田寺殿 永代寄得 善福寺文書寄進

一木 田寺殿 永代寄得 善福寺文書寄進

一木 田寺殿 永代寄得 善福寺文書寄進

一木 田寺殿 永代寄得 善福寺文書寄進

一木 田寺殿 永代寄得 善福寺文書寄進

一木 田寺殿 永代寄得 善福寺文書寄進

一木 田寺殿 永代寄得 善福寺文書寄進

一木 田寺殿 永代寄得 善福寺文書寄進

嘉吉の乱と井原御所

文安六年、大月山重玄庵知行目録

四年八月五日の夜、他の数通の文書とともに盗難に遭い、このうち、文安六年六月十一日付で再度下附された備中守護細川氏久の寺領安堵状のみは、重玄寺文書の中に現存しているが、善福寺大御所の寄進状の原本は、今に至るまで紛失して、その具体的な内容を見ることができないのは遺憾である。しかし、ここに「善福寺殿」ないし「善福寺大御所」と記されている人物こそ、足利系図に「中国武衛、善福寺殿」と記されている足利冬氏ではないかと推察されるのである。

なお、重玄庵領の知行目録は、この文安六年の目録のほかに、その後、長禄三年（一四五九）六月一日付で再度記録されたものが、重玄寺文書の中にあり、この長禄三年の目録では、寺領の内、金永名一円が、文安六年の目録に「善福寺大御所御寄進」と記されていた箇所が、「一、金永名一円田四段、畠三段、宝山和尚ヨリ善福寺殿ノ爲メニ御寄進也」とあつて、この金永名一円の田畠は、善福寺大御所の御寄進ではなくして、善福寺大御所の





うに將軍足利義満の開基と伝承されているが、善福寺という寺名や、前記の、同じ井原庄内にある禪刹重玄寺所藏の文書の記事とも考え合わせて、実は、善福寺殿足利冬氏開基の寺院ではないかと推定されるのである。

#### 四

以上見てきたごとく、備中国井原庄と善福寺殿足利冬氏との関係は、動かせないものがあるようであるが、この地方とのかかわりは、冬氏の父足利直冬の時代からのものであるとみてよい。

直冬は、実父尊氏と養父直義との間が分裂した観応年間（二三〇―五二）の、いわゆる観応の擾乱以来、反幕府勢力となつて、山陰の石見国・山陽の安藝国を中心に、西中国地方において勢威を高め、殊に文和元年（南朝正平七年、一三五二）の暮からは南朝の党となつて、同じく南朝方として山陰・山陽地方に勢いを振るつた山名時氏の勢力と相結んで、文和三年（南朝正平九年、一三五四）の秋には、石見国那賀郡永安別符の地頭で、直冬の与党であつた吉川経兼らを率いて東上の軍を起こし、翌文和四年（南朝正平十年）正月から三月初めにかけては、一時、京都に攻め入るほどの勢いを示した。<sup>⑩</sup>

その後、実父尊氏が延文三年（二三五八）死去して、異母弟義詮が第二代將軍となつて以後も、引きつづき山名時氏と結んで、南朝方として行動し、この全盛期のころの直冬の勢力は、山陰の石見・出雲、山陽の安藝・備後・備中国西部などの地域に広く及んでいた。そして貞治元年（南朝正平十七年、一三六二）冬のところには、山名時氏が山陰から進出して山陽の美作・備前・備中諸国を席捲したのに相呼応して、直冬は、安藝・石見地方を根拠とする吉川氏らを率いて、備後に軍勢を進めている。<sup>⑪</sup>しかし、その翌年、貞治二年（南朝正平十八年）九月に至つて、山名時氏が幕府に帰順した。將軍義詮が、貞治二年九月十日付で、安藝国の武將小早川春平に宛てた御判御教書によれば、<sup>⑫</sup>

直冬没二落備後国二子細、注進狀披見訖、山名左京大夫時氏參二御方一之上者、其堺定可レ属二無爲一欵、可二存知一之狀如件、

とあつて、このころ山名時氏が幕府と和解し、それとともに、備後国に軍を進めていた足利直冬が、同国から何処かへ没落したことを伝えている。

この貞治二年（南朝正平十八年）九月、備後国から没落したことが伝えられて以後、足利直冬の所在は定かでない。しかし、その後も直冬の発給した文書は、「吉川家文書」の中に数通見ることができる。すなわち、

(一) 正平十八年十月十四日、吉河山城守宛、備中国草壁郷地頭職（庄駿河守跡）を、勲功の賞として与える旨を伝えたもの、

(二) 正平十八年十二月二十九日、吉河駿河守（経秋）宛、土佐国守護職に補任する旨を伝えたもの、

(三) 正平十九年二月一日、吉川駿河守（経秋）宛、長門国岩永郷（岡部一族等跡）・同国三原大島・出雲国比伊郷（伊北一族等跡）等の地頭職を、勲功の賞として与える旨を伝えたもの、

(四) 正平十九年四月十六日、吉河駿河守（経兼）宛、安藝国大朝本庄内の地を安堵する旨を伝えたもの、

(五) 同日、同人宛、石見国永安别符、並びに、同国益田庄納田郷内の地頭職を安堵する旨を伝えたもの、

(六) 正平十九年五月十八日、吉河虎熊宛、安藝国仁井野郷（今河孫五郎跡）地頭職を、勲功の賞として与える旨を伝えたもの、

(七) 正平二十年三月六日、吉河次郎左衛門尉（光経）宛、周防国祖生郷（大内介跡）地頭職を、勲功の賞として与える旨を伝えたもの、

このほかに、安藝の「熊谷家文書」の中に、

(八) 正平二十年四月五日、熊谷尾張入道（直経）宛、安藝国小田郷（小早川又三郎入道跡）地頭職を、同国内部庄

内の本知行分の替地として与える旨を伝えたもの、

以上の正平十八年十月から同二十年四月にかけての二年間に、数通の足利直冬発給の文書を見ることができ、その翌年、正平二十一年（北朝貞治五年、一三六六）の暮に出された左記の文書、<sup>⑬</sup>

備後国河立庄、<sup>（北カ）</sup>備中国庄駿河入道之跡、石見国内田肥後守跡等地頭職事、爲二勲功之賞、一所二宛行一也、早任二先例、可レ致ニ沙汰ニ之状如レ件、

正平廿一年十二月八日  
（足利直冬）  
（花押）

#### 吉河讃岐守殿

この正平二十一年十二月八日付の、吉川讃岐守に宛てた恩賞地付与の文書を最後として、直冬発給の文書は見る事ができず、このとき以後、直冬の動静は全く不明となるのである。

ただ、これら前掲の諸文書から窺われることは、直冬が備後国から没落した正平十八年（一三六三）の秋から、最後の文書の発給されている正平二十一年（一三六六）の暮にいたる三年間も、直冬発給の文書は、いずれも南朝の「正平」の年号が用いられており、正平十八年九月に山名時氏が幕府に帰順したのちも、直冬は引きつづき南朝の党、反幕府の立場に立って行動し、吉川・熊谷氏など、安藝・石見地方在地の武士勢力に支えられて、その周辺の出雲・備後・備中・周防などへも、なお一応の勢威を保持しつづけていたことを察せしめる。

しかし、正平二十二年（北朝貞治六年、一三六七）以後、直冬の動静が全く不明となったことは、このころ以後、山陰・山陽地方の南朝方勢力がその力を失ったことを意味するものといえるが、また、この年の暮、十二月七日、第二代將軍足利義詮が死去したことも、何らかのかかわりを思わせるものがある。観応の擾乱のはじめ以来、直冬は、父尊氏・異母弟義詮と相對立する立場に立ち、およそ二十年にわたって反幕府勢力として行動しつづけたのであるが、延文三年（一二五八）四月尊氏が死去し、貞治四年（一二六五）五月には、直冬を疎外しつづけた尊

氏の正室赤橋登子も死去し、今また、その子で第二代將軍となつた異母弟の義詮も世を去るに及んで、直冬は、当面の敵対目標を失うとともに、肉親でありながら、父・弟を生涯の敵として戦いつづけなければならなかつたことへの空しさを深く感ずるものがあつたと思われる。このようなことから、將軍義詮の死去を機として、直冬は、南朝の党、反幕府勢力としての行動を止め、第三代將軍義満のもとでは、幕府に帰順の立場をとるにいたつたものではないかと推察される。かくして、その後は再び政争の舞台にその姿を現わすことなく、世を捨てて、おそらく従來の關係からみて、吉川氏の庇護のもとに、安藝・石見の間の、吉川氏の所領の内において隠遁の生活を送り、一部の系図や記録の伝えるごとく、石見国の何処かにおいて、その生涯を閉じたとみるのが至当であらう。

そして、このような、將軍義満の時代に入つてからの、直冬と幕府との間の和解の状況のもとで、直冬の嫡男冬氏が、備後との国境に程近い備中国後月郡の井原庄に入つて、禪宗寺院善福寺を開創し、土地の人からは「善福寺大御所」とも呼ばれ、また、その末弟である宝山乾珍は、やがて京都へのぼつて相国寺に入り、前記のごく、京五山の高僧として名をなすにいたつたものであらう。

『蔭涼軒日録』長禄二年（二四五八）十一月十九日の条に、「玉潤軒領備中国井原庄事、守護方致二分之訴證之事、預白<sup>レ</sup>之」の記事があり、当時、備中国井原庄が、相国寺玉潤軒の所領であつたことを知る事ができるが、この相国寺の塔頭玉潤軒は、宝山乾珍の開創した塔頭であつて、乾珍と井原庄との關係を物語るものであり、このことは、ひいては足利冬氏と井原庄とのつながり、更に善福寺との關係を、推定せしめる有力な証左となり得るものである。

また、前掲の重玄寺文書の文安六年（二四四九）の「大月山重玄庵知行目録」の中に見える得里名内の田五段の寄進主として記されている「明金長老」は、長禄三年（二四五九）の知行目録には、「広福寺明金長老」と記されて

いるが、重玄寺の古過去帳に、「広福寺殿玉峯明金尼長老、善福寺殿御袋也」とあって、「御袋」と記しているのが、母のことであるとすれば、これは冬氏の生母、すなわち直冬の室、もし夫人を示しているとするれば、冬氏の室である。

## 五

以上の考察から、備中国井原庄に在って、同地に裨刹善福寺を興し、「善福寺大御所」と呼ばれたのが、足利直冬の嫡子冬氏であったことは、ほぼ確かであり、嘉吉の乱の際に赤松満祐から迎えられて播磨へ赴いた人物は、この冬氏の子息であったと推定される。冬氏は、このころ、すでに死去していたと思われるが、その子のひとり、父の遺跡を承けて井原庄の善福寺に住し、「井原御所」と呼ばれていたものであろう。この人物が、祖父足利直冬以来の由緒によって、赤松氏から一軍の将として推戴され、還俗して足利義尊と名乗ったのである。

赤松満祐が、將軍義教を討って京都から播磨へ下国したのち、このように、足利將軍家にゆかりのある、しかも不遇の生涯を終えた足利直冬の血をひく孫の義尊を、わざわざ備中国井原庄から迎えて、これを將軍と称して奉戴したことは、赤松氏が、現將軍である義教を討ちはしたが、これは、あくまで義教個人の多年の悪逆の政治に対して、これを打倒したのであって、足利將軍家の支配そのものを轉覆する意図はなく、義教にかえて、足利家の一門を新將軍として奉戴するという大義名分を示し、それによって、領国内の武士たちを赤松氏の旗下に引きつけるための、苦肉の方策であったとしてよいであらう。

井原御所義尊を、備中国から播磨へ迎えたときの様子について、『赤松盛衰記』（卷之上「赤松満祐嘉吉の乱」）は、次のように記している。

性具入道（赤松満祐）宗徒の侍を近付て評定しけるハ、一門私の計略然らざる義なり。所詮、備中国井原の武

衛（義尊）を尊敬して、日の將軍と号し、不日に入洛を遂、一家天下の執權をして国土を掌に握らん事、疑ひあるべからず。此義如何と宣へハ、諸侍ども心中にハ門出あしく勿躰なしと思へども、異義に及ばず、尤とす。則侍百騎計りにて、典厩（左馬助則繁）備中国井原へ御迎に下りぬ。御辞退に及ハず、武衛、手勢五十騎にて坂本へ上着し給ふ。

と記して、赤松満祐の弟左馬助則繁が、みずから備中国井原庄に赴いて、井原御所義尊を播磨の坂本城に迎えた  
と伝えている。

なお、義尊の弟で、播磨へ向かう途上、備中守護細川氏久の手勢のために、備中国において討たれ、嘉吉元年七月二十八日ごろ、その首級が京都へ送られてきたと、前掲の『建内記』に記されていた人物については、重玄寺の古過去帳の中に、

重玄寺殿贈一品護峰鎮公大居士、諱義将公、嘉吉元年辛酉七月廿一日御他界、当寺大旦那也、井原善福寺カ御館也、

と記されているものがあり、「贈一品」というのは信じ難いが、その他界の年月日からして、この重玄寺殿義将というのが、その人ではないかと推定される。また、この義将は、「重玄寺殿」という法号からして、重玄寺の開基であつたことも察せられる。

## 六

赤松氏に奉戴されて、備中国井原庄から播磨国書写山麓の坂本城に迎えられた井原御所義尊は、その後、『赤松盛衰記』の記すところによれば、

然る間、<sup>（井）</sup>藺原の武衛（義尊）をハ、御所と号し、東坂本定願寺に移し奉る。日夜の酒宴、猿樂、藝能を尽し、

月面白夜ハ連歌をし、或ハ詩歌管絃等の遊興なり。

とあって、義尊は、坂本城から、東坂本の定願寺という、書写山円教寺末の天台宗寺院に移り、幕府の赤松追討の軍勢進発が遅々として捗らない状況のもとで、遊宴の日夜を送っていたことを伝えているが、やがて八月下旬にいたって、山名氏の本国但馬から、国境を越えて南下した山名持豊の軍勢によって、九月のはじめ、坂本の城は攻略され、次いで赤松一族が最後に立て籠った揖西郡越部庄の城山の城も、九月十日落城して、赤松満祐は城中において自害した。

書写山東坂本の定願寺に在った井原御所義尊も、坂本城陥落後、赤松一族とともに城山の城に移っていたが、『建内記』嘉吉元年九月二十五日の条の記事によれば、

或説云、赤松彦次郎教康・同左馬助（則繁）、相伴義尊、一乗船落行云々、若向伊勢一坎、将赴日向一坎、人不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之云々、誰人邪推哉、依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>死骸<sub>一</sub>、浮説充滿者也、

とあって、城山の城の落城の際、義尊は、赤松満祐の嫡男彦次郎教康、満祐の弟で義尊を備中から迎えた左馬助則繁らに伴われて、城を脱出したとの噂を伝えている。

この脱出の伝えられた三人のうち、赤松教康は、脱出後、右の文中に「もし伊勢に向かうか」と記されているごとく、教康の妻が伊勢国司北畠教具の娘である縁を頼って、伊勢の北畠氏の許にのがれたが、『師郷記』嘉吉元年九月二十八日の条に、

後聞、今日赤松彦次郎、憑<sub>二</sub>伊勢国司<sub>一</sub>、下<sub>二</sub>向勢州<sub>一</sub>之處、国司不<sub>二</sub>許容<sub>一</sub>、仍自害、家人十人許、同自害云々、とみえているごとく、九月二十八日伊勢において自害している。また前記の『建内記』の文中に、「はた日向に赴くか」と記しているのは、さきに將軍義教の弟大覚寺義昭が、義教に反旗をひるがえして九州の日向国へ下向したことが想起されての噂であろうが、赤松則繁は、その後ながく行方が不明であったが、九州にのがれて菊池氏

に頼り、嘉吉三年（一四四三）ごろには一時朝鮮へも渡り、<sup>(15)</sup> 文安五年（一四四八）のはじめ再び九州へ帰って、播磨を経て、河内・大和のあたりに潜居したが、同年八月、細川持常の手勢のために、大和の当麻寺で討たれている。<sup>(16)</sup>

この赤松教康・同則繁に伴われて城山の城をのがれ出た井原御所義尊については、何処に身を隠したのか、しばらくその所在は不明であったが、『師郷記』嘉吉二年三月二十一日の条の記事に、

今夜、故右兵衛佐直冬跡、去年赤松、於二播州、欲二取立二之仁、号二井原御所二云々、為二僧形、相二具同宿僧一人、憑二畠山二被二来之間、畠山遣二家人西方許、討二之了、

とあって、城山の城没落の翌年、嘉吉二年の春三月にいたって、義尊は再び僧形となつて、幕府の管領家のひとり畠山持国を頼つて、京都に姿を現わしたが、持国は、義尊を家人の西方という者の許へ送り、これを討ち取らせたことが伝えられている。

なお、井原御所義尊や、その弟重玄寺義将の叔父にあたる相国寺の宝山乾珍は、嘉吉の乱の起こつた嘉吉元年六月のころには、相国寺の鹿苑院主の地位にあつたが、井原御所義尊が赤松氏に奉戴され、重玄寺義将の首級が京都に送られてきた七月末以後の間もないころ、鹿苑院主を辞している。<sup>(17)</sup> このことは、宝山乾珍みずからが、嘉吉の乱に何らかのかわりのなかつたことは勿論であろうが、甥である井原御所義尊らが、將軍義教を弑逆した赤松氏に擁立されて行動するという事態に、血縁のひとりとして、深い自責の思いを感じての進退であつたと思われる。しかもまた、鹿花院主を退いてのち半年を出でない同年の暮、十二月二十五日に、四十八歳を以て示寂していることも、<sup>(18)</sup> このことに関しての心労が、その死を早めたものといふべきであらうか。

# 註

(1) 『建内記』嘉吉元年四月八日・十日・十三日の条。『後鑑』

嘉吉元年四月八日・十日・十三日の条。

(2) 『建内記』嘉吉元年五月四日・七日・九日の条。『看聞御記』



嘉吉元年五月四日・十九日の条。

(3) 『建内記』嘉吉元年六月二十四日の条。『看聞御記』嘉吉元年六月二十五日の条。

(4) 『扶桑五山記』四、相国寺「住持位次」の条。

(5) 『蔭涼軒日録』永享七年十月一日～四日の条。『扶桑五山記』三、天龍寺「住持位次」の条。

(6) 今枝愛真『中世禅宗史の研究』所収、「禅律方と鹿苑僧録」参照。

(7) 『岡山県古文書集』第三輯、「備中重玄寺文書」四、大月山重玄庵知行目録。

(8) 同右、六、大月山重玄庵知行目録。

(9) 『吉川家文書』正平九年六月日、吉川経兼軍忠状。正平九年九月二日、足利直冬御教書(吉川経兼宛)。

(10) 『園太暦』文和四年正月二十二日、三月十二日・同十三日の条。『太平記』卷三十一、「直冬上洛事」、「神南合戦事」。

卷三十三、「京軍事」の各条。

(11) 『吉川家文書』正平十七年十一月二十七日、吉川経政着到状(足利直冬證判)。『太平記』卷三十八、「諸国宮方峰起事」の条。

(12) 『小早川家文書』(小早川家證文二)所収。

(13) 『吉川家文書』(藤家吉川庶流篇目)所収。

(14) 『扶桑五山記』四、相国寺「諸寮」の条。

(15) 『建内記』嘉吉三年六月二十二日の条。

(16) 『東寺執行日記』文安五年八月八日の条。『康富記』文安五年八月五日の条。

(17) 今枝愛真『中世禅宗史の研究』所収、「禅律方と鹿苑僧録」参照。

(18) 『扶桑五山記』四、相国寺「住持位次」の条。『系図纂要』第十冊(清和源氏十一)所収、「足利將軍家系図」。

